



With Kids

海外に住む子どもたちの心の健康をサポートする臨床心理士の会



●● Newsletter 17号 2017年 1月7日 ●●

海の向こうで、日本とは一味違うお正月を過ごされているご家族の皆さま、そして海外に住むご家族への支援をしておられる国内の皆さま、あけましておめでとうございます。With Kidsの活動の柱となっているメール相談のお返事を作りながら、子育て支援は正に家族支援でもあると感じています。家族は子どもにとって重要な環境の一つ。家族もまた子育てを通して成長していけることを願いつつ、これからもWith Kidsの活動を続けていきたいと思っております。今年もみなさまから、ご指導いただけますよう、心からお願い申し上げます。(KK)

With Kids に望むこと

居留問題を考える会は、台湾人と結婚した日本人女性や台湾に永住している日本人が主に参加しているボランティアグループです。With Kids 澤谷代表を始めとする先生方に2009年に発達障害についての講演をして頂いて以来、隔年で全4回、台湾で訪問活動をして頂いております。これまで台北だけでなく、台中、台南や高雄でも個別相談、ワークショップ、講演会、座談会などを行って頂きました。前回2015年の台湾訪問では、各地の日本人学校にご協力頂き、各学校での活動に各地の当会員も参加させて頂きました。子育て、発達障害に関する問題を日本語で詳細に指導いただけるので、参加者は皆とても感動し、更に子育てでの注意点を実践したいと実感しました。

国際結婚にせよ、駐在や永住にせよ、外国での子育て、子どもへのしつけなどは困難が伴います。一人で悩み、相談する相手もなく、言葉も十分にできない状態の方は多くいます。環境や習慣が日本と違い、自分では正しいと考える子育てをしたとしても、それは周りには受け入れられない場合も多々あり、自信を失いかけている母親は多くいます。また、台湾は日本とも距離が近いだけに、逆に日本的

居留問題を考える会会長 大成権 真弓

発想でつい子どもや周りの人に子育ての方法を要求、強制しがちですが、いつもWith Kidsの先生方から、多様な対応の重要性や子どもの気持ちに返ることに気づかせて頂いています。



With Kidsでは、これまでの活動以外に、子どもの年齢により子育ての悩みが異なること、母親自身の心理的問題に起因する問題があること、発達障害についての適切な対応方法などを考慮したプログラムの実施を期待しています。例えば、2、3歳児の行動が、第一次反抗期のものなのか、発達障害であるのか、とても判断しきれない部分があります。学齢期に達した子ども、思春期の子どもでは、また対応も異なります。各年齢に対応した子どもの心のケアについて、ご指導いただけるとな海外で生活している者にとってとても助力になり、気づきの機会となると思っています。各種のプログラムが更に年齢または発達段階によって細分化され、更にベビープログラムや子どもへの個別相談なども取り入れていただけることを期待します。

2017年の台湾訪問活動が、台湾に暮らす日本人の母親たちに更に勇気を下せることを願っています。

環境の変化を乗り越えるために -帰国の場合-

帰国後に、家庭や園・学校で落ち着きなくなった、登園・登校を渋る、成績不振になったなど、心配な様子が見られる子どもは意外に多いものです。

帰国をすると、家族メンバーそれぞれがこれまでと違う仕事場や園・学校通うことになり、一人一人が新しい環境に臨むことになります。生活ペースの速さもこれまでとは異なるかもしれませんし、祖父母や親戚との付き合いにも変化があるかもしれません。

環境とのやりとりで生きている私達が、その変化に反応することは自然なことと言えます。言葉の違いに無頓着と思われる乳幼児でも、心身に影響を及ぼすものです。

新しい環境への慣れ方は、子どもの年齢や海外滞在年数、特性によっても様々ですが、しかし、時を経るにつれ徐々に新しい生活に慣れてくることが多いものです。生活のリズムを整え、子どものみならず家族ができるだけ安心して過ごすことが大切です。子どもが慣れていく様子を、焦らずゆったりと見守ることが必要です。心配な時は、家族だ



けで抱えず、園や学校、お住まいの自治体の相談機関などに気軽に相談してみましょう。

一方帰国は、環境の変化の中で変わらない子どもの良いところに気づくチャンスでもあります。「学校に登校しているか否か」「言葉が話せるか否か」「出来る/出来ない」などに一喜一憂するのではなく、子どもなりの「らしさ」や頑張りを発見してみましょう。

大きな環境の変化は「どこにいてもあなたはあなたで、私にとって大切な人」というメッセージを子どもに伝えるチャンスです。特に、海外生活の長かった思春期の子どもは、「自分はなに人なんだろう?」「どこに居場所があるのだろうか?」と悩むなど、アイデンティティが揺らぐ時期です。人は自分そのものを認められ見守られて、自己感を育み、困難や変化への対応力を身につけて行きます。

変化する環境を家族で越えていく中で、変化に左右されない家族の土台となる何かを見つけてください。(HR)

ことばを育む「ことばかけ」のコツ

日本語に接する機会の少ない海外生活では、お子さんのことば（日本語）の発達が気になることがあるかもしれません。「どんなことばをかけたらいいの？」と悩むこともあるでしょう。自然な遊びや生活の中で、ことばの力を伸ばす「インリアル法」（INterREActive Learning and

Communication）という方法があります。ことばの遅いお子さんのためにアメリカで開発されました。ことばを増やすことだけを目指すのではなく、まずは、コミュニケーションを育てるところから始めようというアプローチです。7つのスキルをご紹介します。

① ミラリング・・・子どもの行動をそのまま真似る

② モニタリング・・・子どもの出す声や音をそのまま真似る

例えば、子どもがバンサイしたら、意味はよく分からないけど、大人もポーズを真似てみます。

ボールが弾がって、「ああっ！」と声をあげたら、同じ声の調子で言ってあげます。子どもは真似をしてもらうと嬉しいのです。反応があってもおもしろいから、またやってみよう、また声を出してみよう、お話ししようとする気持ちの始まりです。

③ パラレルトーク・・・子どもの行動や気持ちをかわりにことばに表わす

「うわっ、ガタンした。びっくりしたね」子どもの気持ちをことばに出して言ってあげると、子どもの安心感にもつながります。

④ セルフトーク・・・おとなが自分の行動や気持ちを口に出して言う

「ああ、おいしかった！」「あれっ、靴がない、どこにしまったっけ？」、自分の気持ちをことばに出すことは、ストレス解消にもなるので、一石二鳥です。

⑤ リフレクティング・・・子どものましがいをさりげなく正しく言い直して返す

子どもが「テレビ」と言ったときに、さりげなく、「テレビね」と伝えます

⑥ エクспанション・・・ことばの意味や文法をひろげて返す

「あ、ワンワン」と言ったら、「あ、ワンワンだ。白いワンワンだね」とか、「ワンワン走ってるね」などことばを付け加えて、内容を広げて返します。

⑦ モデリング・・・子どもに会話のモデルを示す

「* *と言いなさい」と言わせるのではなく、「OO先生に、こんにちしようね」などと言いながら、まず大人がモデルを示します。



・・・こんな関わりを毎日の生活の中で、楽しみながら取り入れてみてください。(SK)

参考文献： 中川信子『1・2・3歳 ことばの遅い子 ことばを育てる暮らしのヒント』

加藤智絵里「ドイツに住んでいる子どもたちの日本語習得のために知っておきたい言葉がけのコツ」『つなぐ ーわたし・家族・日本語ー』より

海外活動報告

2016年11月14～18日にかけてドイツ（デュッセルドルフとミュンヘン）で活動してきました。詳細は次号にて。

メンバー紹介

柚木 颯恩（ゆうき そうし）：現在ドイツ・ボン在住です。日本では、医療・研究機関で神経心理検査やデータ解析に従事。学生時代から個々人の“価値観の違い”に興味があり、ドイツ滞在を機に、ドイツ語でこの国で暮らす方々とディスカッションしたく、現在は語学学校に通いつつ、大学の授業を受講したり、研究補助のミニジョブを請け負ったりしています。お互いの価値観をお互いが尊重しあえる地域社会づくりに少しでも協力ができればと感じている日々です。

メールでの相談を受け付けています。

ホームページにアクセスし、相談フォームにご記入の上、送信してください。

- 相談は無料です
- 匿名での相談が可能です
- 1つのご相談につき3往復までお受けします
- ご相談前に必ず、相談規約をご確認ください

HP : <http://www.withkids-kaigai.com/>

With Kids のHP は (財) KDDI の助成金で作成しました



第17号 発行年月日： 2017年1月7日

発行元／文責： With Kids

—海外に住む子ども達の心の健康をサポートする臨床心理士の会—

代表： 澤谷厚子

事務局： 〒227-0061 横浜市青葉区桜台 16-39

連絡先：

soudan@withkids-kaigai.com

